# 誰もが暮らしやすい まちをめざして

## 公民館主催事業「青年学級にじのはらっぱ」の活動をとおして

青年学級「にじのはらっぱ」は、知的障害のある子どもを持つ親や障害児学級教師の願いから、公民館の主催事業として昭和60年6月に開設されました。

公民館がこの活動をとおして目指しているものを紹介します。

### 障害者も当たり前に生きていくことができるまちをつくる

障害者は長い間、社会から隔離された人目につかない生活を強いられてきました。そのことは障害者の発達を阻害してきたと同時に、障害者への正しい理解がないために、いわれのない差別や偏見を生むことにつながってきました。

そのような差別や偏見を取り除き、たとえ障害があったとしても一人の市民として、特別視されるのではなく、当たり前に生きていくことができるまちを作っていくこと。

これが「にじのはらっぱ」の大きな目的です。

「にじのはらっぱ」の存在や活動内容を市民が知り、関わりを持てるものにすることによって、差別や偏見や無理解を解消していく。さらに活動が地域に広がる中で、市民の理解と協力が深まり、障害をもっていても地域の一員として、共に生きていける地域社会を作っていく。さらに、このような社会をつくっていくことが活動に参加できない障害者に対しても、活動の成果を還元していくことにつながっていきます。

また、障害者にとって住み良いまちは高齢者をはじめ誰にとっても住み良いまちであるはずです。市民一人一人が、潤いのある、豊かな生活を送ることへつながっていきます。

### 集団の中で学びあい、育ちあう関係を豊かにつくっていく

障害者はともすると義務教育修了もしくは養護学校高等部を卒業すると、いままでの友達関係が継続できず、家庭や職場だけの人間関係になりがちです。そこでは親と子、事業者と雇用者という縦の人間関係になりがちで、同年代の青年との横の関係を築きづらい状況が見受けられます。

また、特に在宅のみの生活では、いままでの学校教育の中で培われてきた能力がそこをピークとして、徐々に萎えてしまう傾向にあります。

「にじのはらっぱ」ではスタッフ・ボランティアとして青年を迎え、同年代の友人、仲間として共に活動することを大事にしています。そこではお互いに、一人の人間として尊重しあい、刺激しあい、切磋琢磨する関係が築かれていきます。それは障害者にとっても、青年にとっても人間関係を結ぶ力、社会性を養う上でとても重要です。また、障害者同士の関係も仲間の中で変化していきます。いつもは介助される側であった障害者が介助にまわることなど、その関係は流動的で非常に豊かです。

さらに基礎的な生活技術の獲得も「にじのはらっぱ」の大きな役割であり目的です。活動を通して、例えば、お金の計算ができるようになりたい、字が書けるようになりたい、料理ができるようになりたい…… など、さまざまな意欲（学習要求）が生まれます。この意欲を引き出し、支え、発展されていくためには仲間の関係が重要になってきます。ほんのささいな一言を真剣に受け止められるセンスと行動力をもつ質の高い集団が不可欠です。集団の中で学びあい、育ちあう関係を豊かにつくっていくことを目指します。

### 楽しく、生き生きと自分をだせる場にしていく

障害者の生活はある意味で単調で家庭と職場の往復に終始することがほとんどです。

休日は家族で出かけることでもない限り、家の中にこもりがちになっていることが多く見受けられます。月2回の日曜日、活動に参加するということは障害者の生活に彩りを添え、アクセントをつけることができます。

「にじのはらっぱ」の目的の一つに、自分らしさを